

伝える力

(「話す」「書く」「聞く」能力が仕事を变える！)

池上 彰 著

人は誰でも、面白いことや感動したこと、珍しいことなどを見たり、体験したりしたときは、それを誰かに伝えたくなるものだ。

本書では、特にビジネスパーソンを念頭において「伝える力」の高め方について書いてある。さらに、「伝える」ためには、「話す」こと「書く」こと「聞く」ことも「伝える」こととして取り上げている。

著者の池上彰さんは、元NHKアナウンサーで、現在ジャーナリストとして活躍している。従って、「伝える力」は、NHKアナウンサー時代の豊富な経験を中心に実践的な内容で書かれていて、様々な場面で活用できるようになっている。

「伝える」ために最も大切なこととして、まずは自分自身が「伝える」ことをしっかり理解することをあげている。これは、当然のことかもしれないが、何かを調べるときには、学ぼう・知ろうという姿勢にとどまらずに、全く知らない人に説明するにはどうしたらよいかということまで意識すると、理解が各段に深まり、人に分かり易く、正確に話すことができると述べている。

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」という諺通り、「相手の話を聞く」を第一に「自分は何も知らない」ことを知り、他者から謙虚に学ぶ姿勢を持ち続けていれば、コミュニケーション能力は確実に向上し、「伝える力」が高まったという手ごたえを感じることができる。

映画やテレビドラマ、連載記事を、自分の「話し方」や「書き方」を向上させるテキストとし

て意識して観たり、読んだりして分析すると、相手の心を「つかむ」方法（これを「つかみ」という）が見えてくる。会議等でプレゼンテーションをする場合は、導入部分でこの「つかみ」をうまく活用し、出席者の一人一人の目をしっかり見て、自信を持って行くと、相手を惹きつけることができる。

人に話をするときに「つかみ」と同じくらい大切なのが、危機管理意識を持つことだと述べている。相手に対する愛情が根底にあるかどうか、そして、互いに信頼関係が築かれているかどうかで、表面上は「同じ言葉」であっても、相手に与える印象は大きく異なるので、聞き手への目配り、気配り、心配りは、コミュニケーションの基本ルールである。

より良い文書を書くためには、先輩や上司の書いた文書を見せてもらい、説得力の有無、論理展開の優劣、分かり易さ、文章のリズムなどを研究すること。また、プリントアウトして読み返す、寝かせてから見直す、音読するなどの訓練をすることによって、人の心を動かすような文章力は更にアップする。

難しいことでも簡単に分かり易く書いたり、話したりすることこそ、実は難しく、高度な能力である。難しいことを易しく表現したからと言って、中身自体の質が高ければ、中身が色褪せることはない。「簡単なことは簡単に」「難しいことも簡単に」これが「伝える」ことの基本である。

最後に、「思いついたら、すぐにメモする」ことで、アイデアや企画案が蓄積され「伝える力」が更にパワーアップすると述べている。ビジネスマンはもとより、教育に携わる人達は、ものを「伝える」ことが仕事である。本書で、話す・書く・聞く能力がアップすることを期待している。

(PHPビジネス新書、新書版、205頁、800円)

(長田利彦)